
その蜜は愛のような狂氣

枷月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その蜜は愛のよつた狂氣

【Z-IPアード】

Z0789W

【作者名】

枷月

【あらすじ】

「姉さん、愛しています」私に愛を囁くのは正真正銘血の繋がつた、けれど全く似ていらない双子の弟。これを異常だと言うだろうか、これを禁忌だと蔑むだろうか。このままではいけないのかもしれない、許されることなど有り得ないのだから けれど、もし、許されたとしたら? きっと後は墮ちていくだけ。

何よりも姉を求める弟と、すべてを受け入れる姉と、気の毒な異世界の方々のちょっと歪んだ話

(前書き)

近親相姦要素、残酷描写、異世界要素が苦手な方はこの先に進まないよう！

後書きに裏設定の暴露をしています。

逃げるつもりもなければ、否定するつもりもなかった。

「姉さん、愛しています」

甘い甘い声で囁かれる。

気付けばいつの間にか退路を塞がれていた。

幸か不幸か人通りの少ない場所だけど、本当は晶季　あきとき
がわざわざそういう道を選んでいることを知っている。

平凡な容姿に平凡な学力、運動神経だつて並みで秀でた才能があ

るわけでもない。それなのに私は、執着されていた。

私とは全く似ていない、双子の弟　晶季に。

登校も下校も一緒で、それだけではなく休み時間毎にはメールが
届く。

『シスコン』では済ませられないような愛情の重さに息をするのも辛くなるような濃密な狂氣が入り交じる。

その危うい感情を、私は拒絶することが出来ない。

拒絶してしまったら、きっと壊れてしまうから。

徐々に近付いてくる晶季の、私とは違つて綺麗な顔に、諦めを抱
き始めた瞬間……地面に穴が開いて、一瞬の内に周りの景色が変わ
つていた。

お姫様のような女性が私と晶季を見比べてにたり、笑つた。

あ、と思う暇もなく私は鎧を着た人たちの手によつて晶季から剥
がされて床に引き倒される。

キラキラと輝くオーラを放つ人たちを見上げながら、私は晶季の

瞳に狂氣が浮かぶのに一人怯えていた。

私の存在がないもののように扱われていて、晶季の怒りが満ちていいくのがわかつたから。

「ようじやおいで下をこまました勇者様」

美しい容姿をしたお姫様のような女性がふわりと微笑む。その視線の先に私の姿はない。

「あなた様は異世界より選ばれた尊い方なのです。どうかこの世界をお救い下さい」

「獣王を倒しこの世界を救つたなひまだよつた願いも叶えようが。
……受けてくれるな？」

いかにも偉そうな身なりをした壯年の男が威圧感を出しながら言った。

「姉さんを護るこする世界を……僕が救う……？」

笑い出しそうになるのを堪えてこらめるよつた声で、晶季は呟いた。端から見たら恐怖に怯えているように見えるんだらうが、お姫様のよつた女性が美しい顔に悲痛な色を湛えて晶季の手を握る。

「勇者様、あなた様にはわたくしがついてあります……どうか、どうかこの国をお救いください」

最初から色仕掛けをするつもりだったのか、お姫様のよつた女性は胸を押し付けていた。

晶季が何を呟いたかは聞こえていなかつたよつだつた。

「……僕に、触るな」

パシッ、晶季はお姉様のような女性の手を振り払つ。そして、まるで虫けらを見下すような目を向けた。

「な、何を……」

「勇者の件、お断りします。……姉さん、大丈夫ですか?」

勇者に選ばれるとこいつはいの上なく名誉なことなのだから、その場にいた誰もが当然のようじて承られるものだと思つていったらしくやわついている。

ふにゃりと蕩けるよつな笑顔を向けられた私も、びっくりした。

「姉さんを害する世界を僕が救うわけ、ないんですよ」

「貴様……っ、勇者には傷を付けるなー、その女を捕らえろー。」

青い光が私に向かつて飛んできた。

それからのことば、よく覚えていない。

気が付けば辺りの至るところに赤い水溜まりが床を汚していた。

「晶季?」

「姉さん姉さん姉さん姉さん姉さん姉さん、ほひ、こうすればもつと綺麗ですよ」

赤いものに塗れた唇で、晶季は私に口付けた。

鉄のような味。血の、味だ。

ぬるりとしたものが口内に侵入してきて私の舌を絡めとる。

「ん、ふ……あやめ、っ」

「ふふ、姉さん、どうじてかここに来てからはひどく獣の血が騒ぐ

んです。殺して、しまった。僕が……つ、一人一人、喉笛を咬み切つて……！」

透明な霧を目からポロポロと溢しながら、晶季は私にすがり付いた。

……そういえば最初に、晶季に相手にされないことに腹を立てた女の子たちに頼まれて私を襲おうとした人に咬みついたときも、こんな風に泣いていたような気がする。

嗚呼、皆、死んでしまったのね。

「ここにいたら、きっと誰かに見つかってしまうから。どこか別の場所に行きましょう。」

今さら怖いと思つことはない。

だつて私は、もう。

前に一度、晶季が目の前で獣に変身して人間の腕を咬み千切つたところを見ている。

そしてそれを“受け入れた”のだから。

「姉さんのことは、僕が守りますから」「ええ、ありがとう」

甘い甘い蜜のような、狂氣じみた愛を受け入れてしまえば、後は墮ちていくだけ。

「愛しています。ずっと、ずっと、これからも」

世界が変われば、常識だつて変わる。
異常だった愛も、禁忌だった恋も、ここでは誰も咎めはしない。

「ええ、私も……」

だから私は、見ないフリをした。

血溜まりの中でまだ動いていた人がいたことも、私たちを召喚したであろう魔法陣が淡い光を放つていたことも。

(後書き)

裏設定の暴露

この双子のお父さんは獣王様です。

晶季はこのお父さんの血を濃く引いていたためにケモノの姿になります。

お母さんはかつて獣王様に召喚されて花嫁になり、双子をお腹に宿しましたが直後に人間によつて無理矢理に送還されてしまいました。

それが原因で獣王様は人間を襲い始めました。

お母さんの生死は考えてません。

生きてて、双子との繋がりがあることでも召喚されて親子仲良く世界征服をしてもよし。

死んでて、獣王様が双子を忘れ形見として可愛がってもよし。

ちなみにこの異世界では近親婚は当たり前といつこになつていま
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0789w/>

その蜜は愛のような狂気

2011年9月15日13時12分発行